



1. ある春休みに入ろうとしている日

ベストフレンドからラインがきて、彼が仕事で京都に来るので朝、四条烏丸のところで会うことになった。朝8時、モーニングセットを食べながら、仕事ことやお互いの悩みを語り合った。彼は10時から近場で他の用事があったので、9時30分過ぎくらいまでたっぷり話した。彼とは本当に波長があって、彼といると何よりも落ち着く。

たっぷり話した後、俺は近くの心療内科に行くつもりでいた。たまたまその日の夕方に予約を入れていたのだが、おそらく、朝に変えてくれますかと頼めば変えてくれるだろう。薬をもらうだけだし、時間もかからない。

「すみません、夕方に来る予定になっていたのですが、近いところまで来たので、朝空いていたらやってもらおうかと思ったのですが……」俺は受付で話した。

「朝だったら、次に空いているのは12時となりますが……」と受付の人からは言われた。まだ時計は10時にもなっていない。12時まで時間を潰して待つのはつらい。

「じゃあ、夕方にまた出直します。」

そういうと俺は烏丸通りに出た。あー、ついでにない。家に帰って、しばらく寝るか。俺はベストフレンドにラインした。すると彼から早速返事。

「じゃあ、夕飯も一緒にしますか。5時ごろ終わるので」

「オーケー」

彼と俺は何回あってもお互いに苦にならないのだ。俺は一度家に帰って、しばらく仮眠をし、家でくつろいで、もう一度、烏丸へと向かった。予約は4時だが、せっかちな俺は

例によって、ちょっと早めの 3 時半ごろ病院に着き、診察を受け、薬をもらって、4 時過ぎには烏丸通りに再び戻った。

まだ時間がある。近所に行きつけの喫茶店があって、そこで時間を潰そうか。俺は四条通りへと向かって歩き始めた。するとマスクをした男性とすれ違った。彼は俺の顔をじろじろ見ている。

「國友先生ですか？」

そういって、彼はマスクを外した。あ、思い出した。俺がかつて専門学校で教えていた学生だった。

「僕、今専門学校で教えているんです」と彼は話してくれた。もう 28 歳になったという。彼と前にあったのが昨日のここのようなので、あれから 10 年近い年月が経ってしまったことが信じられなかった。一方で、20 代の彼からしてみれば、その間の年月はそれなりに長かったはずで、彼は本当に久しぶりに思わぬ人であったという顔だった。

彼も時間があって、喫茶店に行こうかと思っていたというので、俺の行きつけの店に一緒に行くことになった。ここは俺の教え子がバイトをしている店である。目立たない地味なお店なのだが、烏丸のビジネス街の中なので、それなりに常連さんがたくさんいるのだそう。今いるマダムは 3 代目なのだそうで、60 代くらいの女性である。映画好きなのだそうで、先日、俺の書いた本をプレゼントした。店に置いておいてくれるらしいから、若い学生やサラリーマンの目にもとまるかもしれない。バイトは近所の大学の学生を何人か雇っている。「皆、卒業するときには他の人を紹介してくれるんです」とおっしゃっていた。学生たちからしてみれば、マダムがお母さんのよ

うな雰囲気なのだろう。行くと、バイトのシフトでもないのにバイトの学生が来てマダムと駄弁っている。その日もある男子学生がいて、彼は前に高校卒業認定試験を受けて大学に行ったので、もう 25 なのだと言っていた。

高校卒業認定試験とは以前の大学検定のこと、名称が変わったのだ。俺も大学検定で大学に行ったんだよと気楽に言いたいところなのだが、それは無理である。様々なトラウマが湧き上がってくる。大検なんて、俺たちの頃は白眼視されるものだったのだ。でも、彼は何気なくそのことを話す。大検や高卒認定と聞くと誰だって、「どういう事情があってなの？」と聞きたくなる。でも、俺は理由は言いたくない。あの嵐のような日々は筆舌に絶するもので、そんなもの聞かないでくれ！俺は彼にも事情は聞かなかった。

お店には特別なものは何も置いていない。トースト、スパゲティ、カレー、ピラフなど、普通の喫茶店メニューである。専門学校の教え子の彼はお腹が減っているとのことで、サンドイッチセットを注文した。俺はトマトジュースを頼んだ。

彼は大学院を出た後、中学などでも講師をしていて、専門学校にも教えに行くことになったのだそうだ。

「専門学校で教えてみたいと思っていたから、楽しいです」と彼は笑顔で話してくれた。40 分ほどよもやま話が続いた。

「先生、専門学校でモテまくりだったじゃないですか。強烈な印象の先生だったし笑」と言ってくれた。そうだったのか。俺は文句もたくさん言われたし、専門学校の仕事はしんどかったんだけど、好きだと思ってくれていた子はいたみたいだ。もっと自分に自信を

もたなくては！

その後、ベストフレンドからラインがきて、そろそろ会う時間になりそうなので店を出た。専門学校の子はもう社会人だから割り勘でもいいかと思ったが、かっこつけておごった。どっちみち、2人で1200円もかからないし、この頃金欠だけど仕方がないか。

「これからも、keep in touch しましょうよ」

「いいけど、若い子と付き合うと俺がおごらなきゃいけないからね笑。あなたはもう社会人だからおごらなくてもいいだろうけど」

「幾つになっても、僕は教え子じゃないですか。だからおごってくださいよ笑笑」

そういう話をしながら、別れた。Facebook でつながった。

ベストフレンドとの夕食はヨドバシカメラである。串カツバイキングのお店に入った。

彼とは、もう長い付き合いになるが、女性の話をしたことはない。俺が女性と付き合えない性格だということがわかっているから、俺の前では気を遣って言わないだけのことで、女性はいるのかもしれないのだけど、そういう話をしなくても男の友情は続いていくのだ。

彼と俺が上手くいっている理由の一つはお互いに金遣いが荒い。金銭感覚が似ているのである。また彼も俺も、わりと親に経済的に頼って生きてきているので、男は親に頼るべきではないという考えに囚われていない。お互いに車も乗らないし、タバコもしない、お酒も付き合い程度。この上、女の話もしないんだから、ほとんど男っぽさ皆無なのだ。

俺は自分が男か女かわからない。男になりたいけど、男になることに抵抗する、男って何???

2. 女子学生に手作りのケーキをもらう。

次の日。

この日はまだ期末テストだった。テストが終わった後、女の学生から「先生、レアチーズケーキとか食べますか」と突然、訊かれた。彼女が自分で作ったケーキをお裾分けに持ってきてくれたのだ。可愛らしい包みに入れて、優しい女の子だなあと考えた。先生冥利につきる瞬間である。こういう子は時々いるのだ。

前にある出版社の男性と話した時だ。

「じゃあ、女子学生の人たちとはうまくいっているんですね。國友さんの本、読んでみるとあまり女が好きじゃないんじゃないかと思ってたんだけど」と言われたことがある。

これに対する答えは Yes&No である。確かに女子学生の中には可愛い女子学生もいる。しかし、それは恋愛対象という意味ではないのである。俺はおそらくもう一生、女性と恋愛はできない。女性に対する偏見は抜けないのだ。

俺は大学に入ってから前向きだった。不登校の過去を帳消しにしたかったからだ。しかし、俺には、大して深く考えている余裕がなく、英文科を選び、女の子が7割以上という環境に投げ込まれて、またしても女の子たちから悪口を言われ続けることになった。たまたま入った大学がクラス制を敷いていたので、いったん入ったクラスが上手くいかないとはそれはずっと続いていく。そして、結局彼女たちへのわだかまりは消えることなく、俺は大学を後にしたのだ。

俺だって苦しんだ。今だって、当時の女の子のことが夢に出てくることがある。しかし、

人の心というのは苦しんでも変えられない。苦しみぬいてよくなるケースもあるだろうが、俺にこんな苦しみを味わわせる原因を作った女性が許せないという気持ちが湧いてきて、女性とまともに付き合うことができないのである。

3. 400 円の焼きそばを食べた。

その次の日。

この日は FB にリクエストが来た。知らない男子学生からである。もう 20 歳過ぎているから問題はないんだろうけど、いささか躊躇した。しかし、共通の友達の先生がいるので、まあ、いいか、FB は実名だし、学生たちはほとんど使っていない。アカウントを持っているだけだ。学生の方は躊躇しないが、俺の方は学生と SNS でつながるのはなんとなく怖い。悪さをされたら困るしなあ。それを前に話したら、ある学生から「先生、僕らを小学生みたいに思っている。大学生がそんなバカなことしないでしょ」と言われた。確かにそうだなあー先生の中には FB を公開している人もいるし、FB を悪用したりするのはよほど一部の人たちであって、普通の人はそこまでしたいとも思わないだろう。まあ、いいか、とリクエストを承認した。

「実は國友先生の授業取りたかったんです。だけど、とれなくて、今の先生になったんですけど、今の先生と FB で繋がって、友達の中に國友先生の名前があったので、リクエストさせていただきました」というきちっとした内容のメッセージが届いた。真面目な学生という印象である。この子だったら大丈夫だろう。

この日は大学の近所の喫茶店で、ランチを食べた。そこは 2 年前に卒業した体育会系の男の子が教えてくれた店である。女性が 2 人でやっているのだが、40 年ほど前からある店なのだそうで、当時はお姉さんだった女性たちも今はおばさんである。この店が体育系の子に人気があるのは焼きそばが安いからで、卵が付いてボリュームもあって 400 円である。

写真を撮って、今は東京で働いているその男の子にラインで送った。

彼から早速返事。「せこっ。俺も行きたい！」

こんな安いところで食べるなんてせこいということらしい笑。彼は大学の頃から俺にコミュニケーションしてくる子で、卒業して、一度は一緒に会おうとしていたのだが、何せ東京なので会う機会がない。俺の方もこの頃行く機会がないし、彼も京都に遊びに来ようにもまだ給料が安いからお金がないとのことである。この頃の学生は大概是東京に行ってしまう。最初は東京で研修して、そのあと、名古屋や札幌や大阪に配属ということにもなるのだが、とりあえずは東京。

昔、フェミニストはよく言っていたものだ。女は結婚すると檻に入れられる。しかし、男だって檻に入れられている。この頃は一流どころの企業は全国区になってしまっているのに、勤務地はなかなか選べない。選んだりしたら、出世コースから外れるだろう。男は社会という檻に入れられている。そして、そこで飼い慣らされていく。そこで男たちはいつの間にか自分をなくしていく。男にはそういう人生しか用意されていないのか。

今年で定年のある女の先生が言っていた。

「女は定年になっても、したいことがいっぱいあるから大丈夫なんですよ。むしろ時間

ができるのが嬉しい。」

確かに女性の年寄りには元気だ。男は身体は元気な人でも、定年になって、自由になったという雰囲気ではない。むしろ居場所がなくなって、時間を潰せなくて、所在なさげにしているおじいさんがどれだけ多いことか。男って、損ばかりしている。なのに、男たちはそのことに気づかないのだ。

「夏には東京に遊びに行くと思うから」と東京の元教え子にラインを返したところ、「肉を食わせて！」と返事。「じゃあ、風呂も付き合ってくれな」と返事すると、「肉食った後風呂」と返事が来た。俺は色々な男の人と風呂に入るが、俺が風呂に誘うのは大概は体育系のやつなのだ。彼らと風呂に入ると、体育会になったような気持ちになってすごく楽しい。

女性たちは、一般にスポーツ問題のことがわかっていない。スポーツ系のやつは爽やかで、さっぱりしていて、魅力的だ。それはおそらく彼らが男性性を発散しているからだ俺は理解している。社会のシステムはスポーツと似ている。そこでプレーしていくことに彼らは慣れてしまっているから、ホモソーシャルな社会にも適応しやすい。スポーツができない男は、男性的な活動から除外される。男の部分を発散できないまま、孤立感を深めていく。俺はまさにそういう男子だったのだ。今頃になって、マッチョな男たちと風呂に入ること、若い頃にできなかった夢を疑似体験しているなんて、寂しい話だ。男に生まれること、とりわけスポーツができない男に生まれることは悲劇である。

4. 東京が好き、九州は嫌い。

そのまた次の日。ひたすら寒い1日。

仕事が終わった後、マッサージの人に来てもらった。いつも通り、楽しく歓談しながらボディメンテナンス。

「俺、昔はこの時期に上半身裸でマッサージ受けていたよね？ あの頃はまだ若かったのかなあー」

「今年はとりわけ寒いですよ」

彼もラグビーや陸上をやっていたスポーツマンである。彼に話を聞いてもらいながら、マッサージをしてもらうようになって、もう6年である。もうお互いのことをほとんど知り尽くしている。彼は俺が九州嫌いで、地方恐怖で、都会にいたいと思っていることも知っている。

「俺は75で死のうと思ってるんだ。京都が好きだし、京都の市外局番は075だからね」

「じゃあ、75まで京都で暮らして、そのあとは九州に行ったらどうですか笑。九州だったら市外局番がもっと大きな数字だから、75から第2の人生」

「なるほど。それもありがた笑。でも俺は九州で骨を埋めたくないからね」

今年の夏休みは学会で仙台に行くことが決まっている。埼玉の大宮に叔母が住んでいるので、叔母に久々に電話した。仙台は叔母のところからだと新幹線で1時間ぐらいで行ける。仙台に長くいるよりも、叔母のところ止まって、その前後を東京で過ごして、かつての教え子と会ったりしている方が楽しいだろう。他にも会ってくれる人はいるだろうか。

5. 消えない過去

そのまたまた次の日。

朝からテストの採点。そのあとお昼から『デトロイト』を見に映画館へ。これで 6000 ポイント貯まった。このシネコンでは 6000 たまると 1 ヶ月のフリーパスがもらえる。その間は無料でいくらでも映画が観れる。ちょうどいい時期にたまったものだ。これからの 1 ヶ月はしばらく時間のゆとりがある。

そのあと、しばらく眠り、夜から『祈りの幕が降りるとき』を早速みる。フリーパス鑑賞第 1 作である。

最近になって、松本清張原作の『ゼロの焦点』をネット配信で見た。これは何度かドラマ化もされていて、ストーリーは大体知っている。元パンパンだった女性はその過去を隠すために殺人を重ねていく物語である。彼女はパンパンになりたくてなったわけではないのだから、彼女をそういう状況に追い込んだ社会が問題なのだけど、社会はそれを個人の責任にしようとする。だからと言って、人を殺していいということにはならないが、忌まわしいトラウマを理解してもらえなかった人間は社会全体を憎むことになる。それをエクスキューズとして彼女の殺人は始まるのではないか。そんなことを考えた。

そういえば、松本清張原作の映画といえば『砂の器』が有名だが、これも同じテーマだった。ハンセン病であるがために迫害された父親との過去が原因で殺人を犯してしまう音楽家の物語。

『祈りの幕が降りるとき』も過去との相克を描く映画である。何も予備知識なしで見たのだが、面白かった。

6. 壊れた心

そのまたまたまた次の日。

このところ原稿を書くのが重い。過去のことを書こうとするのだが、それを始めると辛い気持ちが蘇ってくるので、できないのだ。思い出すことすら辛くなってきている。それは俺が初老になって、もうだいぶ人生がわかってきて、どれだけ思いを巡らしてもこの思いは消化できないという諦念の思いを抱き始めたからだろう。何年か前だが、「過去に囚われていると先に進めなくなる」とある先生から言われたことがある。その先生と限らず、過去は変えられないことは皆が言っていることなのだが、俺は過去に押し戻される自分をどうすることもできないのだ。過去のトラウマが大きければ大きいほど、あの過去がなかったら、俺はこれだけ苦しまなくても済んだのではないかという気持ちが湧いてきて、過去を恨みたくなるのだ。心はある日突然に壊れるのだ。そして、いったん壊れた心を元に戻すには膨大な時間がいるのだった。

この日はフリーパス鑑賞第 2 弾で『嘘を愛する女』を見た。これまた過去の話で、主人公の恋人は実は以前、結婚していて、その時にトラウマを追って、それを忘れたいがために瀬戸内から東京に出て暮らしているのだということがわかっていく。東京だったら、誰も過去のことは聞かない。『時代屋の女房』という映画で、「何も言わず、何も聞かずに都会の流儀」という言葉が出てくるが、東京は過去を忘れた人のための町なのだ。

7. 呼吸が苦しい！

そのまたまたまたまた次の日。

朝からテストの採点三昧だった。

昼頃からちょっとだけスポーツクラブ。30分、トレッドミルでウォーキングしただけで激しい疲れ。この頃呼吸が苦しい。いつか胸が苦しくなって、ぼったりいきそうで怖い。痩せなきゃなあー。呼吸の調子が悪いのは体重のせいだろう。

父が死んでから早20年が経つ。時の流れはあまりにも早い。あの時のことは今でも克明に覚えている。その1年ほど前から父が癌だということは知っていた。しかし、当人には明かしていなかったし、父は天然みたいな人だったので、本人も死ぬとは思っていなかった。また一時期は回復したので大丈夫かとも思っていた。

しかし、2月の下旬、俺の誕生日の数日前に容態急変の電話がきて、俺の誕生日の前日26日に父はなくなった。父は若い頃から糖尿病で、何度も危ない時期があったので、65歳まで生きることができたのはむしろ幸運だった。俺は体は丈夫なので、65で死ぬということはないだろうが、50代になるとさすがに体のことが気になってくる。

今年の冬は思いのほか寒い。暖房は冷房よりもお金がかかるので、いつもの年だと多少は使うのを控えるのだが、今年は惜しみなく使っている。暖房代ぐらいはケチっちゃいけない。もう若くはないのだから。

スポーツクラブの後、家で仮眠。

そのあと、突然ベストフレンドから連絡がきて、夕食を食べることになって、京都駅へ向かった。さっぱりと和風の食事。彼とは本当に一生に一人の親友である。

夜中。突然、この1年教えていた男の子からメッセージでメッセージが来た。「1年間ありがとうございました。先生のなんとも

言えないキャラ、嫌いじゃないですよ」と書かれていた。嫌いじゃないということは、好きでもないってことなの?????笑笑

8. 『殿、利息でござる!』

(中村義洋監督・2016)

こんな調子で俺の1週間は過ぎていった。読者の人たちはまたいつもと代わり映えがしないことが書かれているなあと思っているだろう。でも、50代にもなるとそうそう変わったことなんて起きないのだ。

この頃、唯一変わってきたことは、掃除をするようになったことだ。俺の周りの男性は綺麗好きが多いので、俺の部屋に来るとあまりの汚さに驚いて、頼んでもいないのに掃除をしてくれる。多少はあやからなくてはならないと思い、この頃、できる限り無駄なものは捨てていて、トイレやバスもマメに拭き掃除している。今だったら、誰が遊びに来てくれても、いつでもオーケーだ。

今回見たこの映画は、時代劇で阿部サダヲが主演なのでコメディかと思いきや、シリアス調だった。俺は時代劇は元々苦手な大きなことは言えない。ただ印象に残ったのは、江戸時代の家屋の中が掃除が行き届いて綺麗だったこと。江戸時代は、戦争もなく、最高の時代だったという人もいる。当時の人は涼やかで、キリッとしていて、凜とした美しさがある。みんな背筋が伸びているし、猫背の俺とはえらい違いだ。

21世紀の日本映画は先に挙げた映画も含めて、死を思わせる、ゾンビのような話が増えていっている。ポスターを見ただけで、陰鬱で、見る気がしなくなるものが多いのだ。そ

のことをある映画の仕事をしている女性に話したら、「でも今の若い子たちはそういうの方が好きだろうから」と言われてしまった。そうか、だからこそ、時代劇でキリッとした姿を見せられるのも心が洗われるという部分があるのだろう。

これから世の中、どうなるのか。とりあえず、もう若くはないのだから、神様がくれた時間だと思って、日々を大事に生きていくしかないのだ。

俺の人生はこれからどう流れていくのか。神様にお任せである。死ぬ前に存分、男を発散させて、男に生まれてよかったという気持ちを味わってみたい。それができれば、俺の人生は成功だなあこの頃は思っている。

男は痛い！でもマッチョになりたいです！！笑